

名軍師 黒田官兵衛 その五

講談師 一龍斎貞花

戦国武将作品はやはり人気があり、企業講演、講談とご依頼をいただいています。歴史に学ぶところが多くあります。



織田信長に背いた荒木村重は、織田軍の総攻撃に逃げ出し、信長は裏切りの見せしめに村重の妻子ばかりか、召使いの女まで五百余りを処刑。家来を見殺しにして毛利への助けを求めた村重は、その後、剃髪して茶道を究め、秀吉の茶会に平気で出席するとは、許せませんね。

一年もの幽閉に耐え、救い出された黒田官兵衛。片方の足の関節は曲がり、髪の毛は抜けて禿頭な

がら、羽柴秀吉の三木攻めに駆けつけ、城を包囲すること丸二年。食糧は尽き、城内の鼠まで食い尽くされていた。官兵衛、使者として三木城へ。会談は三度に亘ったが、別所長治以下重臣切腹し、家来の命は助けられたのです。後世に残る別所の奪戦。長治わずか二十三歳の若さ。村重とはえらい違いです。

毛利に組した官兵衛の主人小寺政職は、三木落城後滅亡。政職の子孫は皮肉にも福岡城主となった黒田家に召し抱えられております。

家来官兵衛の進言を受け入れ、織田に従っていたならば小寺家はかなりの大名になれたかもしれませ

ん。織田の勢力、時代を読めなかったがための敗北でした。

三木に入城した秀吉が、

「流石要害。自分の居城にして中国攻めの拠点にしよう」

「それは宜しくございませぬ。守るのは宜しいが、交通不便な山間。政治の地ではございませぬ。我が姫路こそ殿の居城とする条件を総て整えておりましよう」

かくして、秀吉は官兵衛を普請奉行にして大改修。当時は小さな城。これを石垣を張り巡らせた

三層の天守を築き、西国攻めの拠点となった。官兵衛は城造りの名手でした。

現在の乾小天守は秀吉時代の天守で、本格的な近世城郭となったのは、徳川家康の娘婿、池田輝政が九年の歳月をかけて築き上げ、日本の代表的名城として国宝、そして平成五年世界遺産に登録されました。



戦わずして勝つ孫子の兵法

天正九年、秀吉は二万の軍勢で鳥取城を包囲。事前に周辺の米を高値で買い占めて兵糧攻め。三木攻めの時はひそかに米が運び込まれていたのが長く籠城できたわけで、運び込まれないよう買い占めたのです。約二百日籠城するもまったく食糧なく、撃ち込まれた弾丸に当たって重傷を負った者があると、ワツと取り囲んでその人肉を、なかでも頭の肉がよいと競って食べたという、正に地獄の有り様。歴史上有名な秀吉の鳥取城の飢え殺し、味方の損傷を防ぎ、相手を倒す兵糧攻め。官兵衛の進言があつたといわれます。

続く備中高松城の水攻め、最も活躍したのが官兵衛でした。沼地の中の浮島城といえる縄張り、城主清水宗治五千の兵で死守。大軍をもって攻め寄せるも沼地とあって足をとられ、もたもたしている城内から撃ち出す鉄砲の弾に当たってバタバタ倒れる。この地形を見た官兵衛が水攻めを進言。秀

吉の命令で堤防を築こうとするも、湿地のため石や砂を入れた俵が動いてしまう。そこで杭を地中に深く打ち込んで俵が動かぬようにして俵を積み上げ、その上に土を盛る築堤の方法。官兵衛は土木面にも知識があつたが、秀吉の家来に

は州俣の一夜城を造るなど土木工事に詳しい蜂須賀小六、前野将右衛門という家来もあり、約二千の兵を川中に並ばせて土俵を積む。天正十年五月八日より築堤にかかり、五月十九日に完成。わずかな日数で城を取り巻くんですから差配者がいかに優れていたかが判ります。折からの梅雨で城はまったくの水びたし。この間、官兵衛は味方の兵が住民に乱暴を働かぬよう禁止行為を発令。やがて毛利の大軍が到着。秀吉と毛利勢対峙するも城内は兵糧が尽き、落城寸前になんと、明智光秀の謀叛によって信長の死が伝えられるや、泣き叫ぶ秀吉に官兵衛が、

「天のお加護を得させ給い、今こそ貴方が天下取りに立ち上がるべきです」

ハツと我に返った秀吉が、

「こ奴、わしの腹を読みやがったな」

という顔をした。

「しまった。余計なことを言った」と反省。以後、言動に注意。

毛利内に「信長が討たれたなら、秀吉と戦うべき」という言葉に、知将の小早川隆景が、

「父、元就公は中国を治めよと申された。それに秀吉殿は天下を臨む人。和議を結ぶべし」

隆景の読み見事。和議を結んだから、のちに毛利は百二十万石の大大名に。

官兵衛、この時「何卒、毛利家の旗指物をお貸しください」

「鎧兜、武器、銃弾は船で尼ヶ崎へ運ぶから身軽で走れ」と兵に指示。

農民から米を高く買い上げ、夜も走るから道普請、炊き出しを頼み、握り飯を食べながら走り走り、当時一日の行軍五里のところを二十里走らせる大返し。

光秀との山崎の合戦に、毛利の旗を立てる也。

「毛利と結んで秀吉をはさみ討ちにするつもりだったのに、秀吉に荷担するとは」と、明智軍、戦意喪失。着眼点と兵站による秀吉軍の勝利。

軍師官兵衛に学ぶところ、さらに続きます。何卒、おつきあいください。 ■

